

京都フィロムジカ管弦楽団



第 23 回定期演奏会

2008 年 6 月 8 日 京都府長岡京記念文化会館

京都芸術センター制作支援事業

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねてはや第23回目となりました。今回の演奏会は、第5回と第10回に指揮者をして下さいました池田 俊氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、本日ここに魅力あふれる交響曲を、披露してくれるものと期待致しております。曲目も久々にニールセンの作品を取り上げ、馴染みがあまりなかった作曲家の名前も、より身近に感じられるようになったのも、フィロムジカ管弦楽団員のおかげと思っております。皆様にはその努力の結実を演奏の中にお聴きいただき、楽しい一時をお過ごしいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

「音楽をじっくり聴く」ということは大切なことです。音楽界もデジタル化が進み、さまざまな音源があふれ出してきました。今では、たくさんの曲を頭だけ聴いたり、曲の聴きたいところだけを飛ばしたり、一曲を数秒にまとめたりすることが簡単にできるようになりました。音楽は鑑賞するものであったはずが、今や音楽は選び出すものになりつつあると言えるでしょう。しかしそれでは音楽本来の持つ意味あいを失ってしまいます。特にクラシック音楽は最初から最後までじっくり聴いてもらうことを想定して作られています。聴き所をより効果的に演出するさまざまな工夫を作曲家はしているのです。私たちは作り手の意図するものを十分にくみ取り、作曲家が言いたかったことを漏れなく聴衆に伝えます。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

京都フィロムジカ管弦楽団 第23回定期演奏会

京都府長岡京記念文化会館

2008年6月8日(日) 午後2時開演

1:15～ ロビーコンサート

∞ 曲目 ∞

ニールセン (1865-1931) / 交響曲第1番

Carl NIELSEN : Symfoni nr.1 G-moll, Op.7

I. Allegro orgoglioso II. Andante III. Allegro comodo - Andante sostenuto IV. Allegro con fuoco

— 休憩 —

ニールセン / 序曲『ヘリオス』

Carl NIELSEN : Ouverture HELIOS, Op.17

ベートーベン (1770-1827) / 交響曲第8番

Ludwig van Beethoven : Sinfonie Nr.8 F-dur, Op.93

I. Allegro vivace e con brio II. Allegretto scherzando III. Tempo di Menuetto IV. Allegro vivace

指揮 池田 俊

携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。

客席での飲食・喫煙・写真撮影・録音・録画、上演中の私語は固くお断りいたします。

補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

演奏中の入場は固くお断りいたします。

~~~~~

## ロビーコンサート

ベートーベン / 管楽八重奏 より

Ob.石原、須貝 Kl.田中慎一郎、上高原 Fg.常見、石塚 Hr.草木、片山

ベートーベンはその作曲家としてのキャリアの初期に、数曲の管楽器群のための作品を残しています。ハイドンやモーツァルトといった古典派の作曲家の先達に倣い、軽やかな曲調で宮廷での演奏を意識して作られているのが特徴です。その中で本日は管楽八重奏という、木管楽器奏者にとっては欠かせないレパートリーを演奏いたします。(田中)

ブラームス / 弦楽六重奏曲 第1番 より 第1楽章

Vn.田原、西村せり花 Br.相澤、田中邦人 Vc.小林、多田

今回、プログラムのメイン曲がベートーベンということで、彼の影響を強く受けたと言われているブラームスを取り上げます。ゆったりとしたテンポのなかで、緻密な音の重なり、次々と溢れ出す美しいメロディをお楽しみ下さい。(田原)

## 指揮者

池田 俊 (いけだ しゅん)



兵庫県西宮市生まれ。大阪音楽大学附属音楽高等学校から大阪音楽大学へ進み、指揮を斎藤秀雄氏の指揮法教程で研鑽を積み、トランペットを斉藤広義、金石幸夫氏に師事。卒業後、大阪フィルハーモニー交響楽団のさそいを受け入団。1974年、ドイツのデトモルト国立音楽大学へ留学。指揮法と室内楽の研鑽をヨスト・ミヒャエルス、トランペットをヘルムート・シュナイディビント氏に師事。帰国後、大阪フィルに再び首席トランペット奏者として迎えられ、1995年、大阪フィルハーモニー交

響楽団を退団し本格的に指揮活動に入る。指揮とトランペットを兼ねた大阪シュベルマー金管アンサンブルのコンサートで大阪文化祭〔奨励賞〕〔本賞〕を受賞。

1997年、オーストラリアでのブリスベン国際ブラス・フェスティバルに招かれ、オーケストラに関する演奏法の指導やコンクールの審査も務める。

1998年、関西フィルハーモニー管弦楽団と指揮者デビューコンサートを開催し、豊かな音楽性を持つ才能ある指揮者と絶賛され、〔神戸っ子〕のブルーリボン賞候補に指揮部門でノミネートされる。以来、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪シンフォニカー交響楽団、広島交響楽団、奈良フィルハーモニー管弦楽団、エウフォニカ管弦楽団、ウィンドカンパニー管楽オーケストラ等で指揮、近年は大阪市音楽団からも招かれている。またアマチュア分野においては橿原交響楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、八尾フィルハーモニー交響楽団、西宮吹奏楽団、その他等で客演指揮者として招かれている。

2001年、ブルガリア国立室内オーケストラを指揮し好評を得る。

2004年、ブルガリアのソフィア市で行われた第1回ワークショップで、国立ブルガリア・ソフィアフィルハーモニー交響楽団を指揮しディプロマを授与され帰国。

現在、プロ、アマを問わない多彩な指揮活動を行い、特にアマチュアのオーケストラや吹奏楽団の演奏向上に力を注いでいる指揮者として評価を受けている。

日本指揮者協会会員

高知大学交響楽団（常任指揮者）

香芝シティ室内オーケストラ（専任指揮者）

JAPANアカデミー・トランペットアンサンブル指揮者（音楽監督）

奈良教育大学非常勤講師



かなり昔の話になるが、シューベルトの弦楽五重奏曲を近衛秀麿がオーケストラ用に編曲した作品を聴いたことがある（高

関健指揮、大阪センチュリー響第51回定期。1998年11月17日。シンプオニホール）。近衛は、「シューベルトがこの五重奏曲を交響曲として着想していたらこんな曲になっただろう」という発想の下で編曲をおこなったのだろう。しかしその響きは、簡潔で渋いシューベルトの音色とは似つかぬものであり、むしろニールセンそっくりであった。日本のオーケストラの黎明期に活躍した近衛は、「下手なオーケストラを馬鹿な指揮者が振るため」（近衛自身が朝比奈隆に語った言葉。『朝比奈隆 交響楽の世界』より）に、ベートーヴェンを始め様々な古典の作品を大幅に編曲して演奏した。合奏しやすく且つ個人技量の未熟さが隠れるように、多数の楽器を重ねるように編曲したのだ。そうしてできた厚ぼったく重厚な近衛の響きが、ニールセンの響きにそっくりなこと、ニールセンも同様に多数の楽器を重ねるオーケストラレイションをする人だっただけだということを示している。それではニールセンの作品も「下手なオーケストラと馬鹿な指揮者」にふさわしい作品に過ぎないのだろうか？ 答えは「否」である。一見、工夫が無さそうに思われるニールセンの分厚く鈍重なオーケストラレイションは、ニールセンならではの個性的な作風を裏打ちする重要な役割を負っているのである。ニールセンの独創性は、音楽の密度の高さにあると僕は思う。例えば、ニールセンの書く旋律には頻繁に裝飾音符が使われており、少しでも多くの音を使いたいという意思が表れているように思われる。また、短い楽章であっても頻繁にリズムや曲の雰囲気を変化しており、思いのたけを注ぎ込めるだけ注ぎ込んでやろうとしているように見受けられる。多数の楽器を重ねてできた濃厚な響きも、密度の高いニールセンの音楽を形成するのに不可欠なものなのだ。このような濃厚な音楽を聴くことは大変な重労働だ。しかし、鑑賞後に感じられる充実した疲労感の心地良さこそ、ニールセンを聴く醍醐味である。

こうした濃厚なニールセンの音楽の源泉は、おそらく彼の生い立ちにあるだろう。ニールセンは1865年に北欧デンマークの片田舎で生まれた。いわゆる「貧乏人の子沢山」の家庭。しかしながら、父親はヴァイオリンの演奏、母親は民謡の歌唱を趣味としており、生活に音楽があふれる明朗で幸せな家庭であったらしい。ニールセンは少年時代から即興で作曲をし、軍隊隊でソウティングを勤めるなどして音楽家としての頭角を徐々に現し、19歳でコペンハーゲンの音楽院に進学。その後、王立管弦楽団の第2ヴァイオリン奏者として働き、仕事のかたわら作曲をおこなった。このように、ニールセンの音楽人生は神童・天才ともはやされる類のものではない。土に根ざした民謡を空気のように吸収し、演奏家としての地道な経験を糧にして、自らの音楽を積み上げていったのである。ニールセンの音楽には、こうした泥臭くも逞しい彼の生き様がたっぷりと注ぎ込まれているのだろう。

本日演奏する交響曲第1番は、1892年に完成された作品で、この曲の成功によって彼は作曲家としての名声を確立する。奇しくも同じ1892年、ニールセンと同年のフランクの巨匠・シベリウスが交響曲『クッパルヴォ』を完成、その初演の大成功によって名声を確立した。このころ西欧では、ブルックナーとブラームスが老境を迎え、ワーグナーが交響曲の解体と再創造を進める。西洋音楽が未来への胎動を始めていたこの時期、北欧の音楽もかつてない爆発的な発展を始めたと言えよう。その流れは、北欧出身の音楽家たちが世界を席巻するまでになった現代の北欧音楽の隆盛へとつながっていく。

第1楽章「Forgioso（誇らしげに）」という表情記号に、今まさに音楽界に殴り込みをかけようという若き作曲家の並々ならぬ意欲と決意が見取れる。その表情記号にふさわしい、弦楽器による力強い主題によって印象的に曲が始まる。どこか不気味な緊張感を漂わせた動機や、穏やかで幸福感ある歌など、非常に変化に富んだ多数の旋律が歌われる。さらにそれらの要素が、時にワーグナーのように厳格な表情を見せたかと思えば、時にカオスのように混濁した展開を見せる。実に複雑で密度の



濃い音楽だ。コーダでは疾走するような快速のテンポに変貌し、荒々しく閉じられる。

**第2楽章：**アンダンテ。この曲の白眉とも言うべき充実した楽章。そもそもこの第1交響曲はシューマンの交響曲とほぼ同じシンプルな楽器編成であるが、この楽章ではトランペットとトロンボーンを休ませて一層簡潔な楽器編成となる。しかし、金管を減らした分、官能的な旋律を歌う弦楽器の艶やかな音色が前面に出ることになり、ニールセンならではの濃厚な味わいがかえって強化されている。三連譜が旋律にも伴奏音型にも多用され、この執拗なまでの三連譜の繰り返しが麻薬のように作用して聴く者を陶酔の世界へと引きずり込む。大きな波のように強弱が繰り返されるクライマックスを過ぎると、楽章冒頭の音型をこだまのように繰り返しながら名残惜しげに終わる。

**第3楽章：**5部形式を取るスケルツォに相当する楽章。「comodo（ゆったりと）」と表情指定がなされており、間奏曲のような穏やかさと軽やかさをも備えている。弦楽器による波のような伴奏音型に乗って、田園情緒を湛えた穏やかな主題が歌われる。一見単純そうに見える主題だが、実は演奏困難なシンコペーションで書かれており、伴奏音型との微妙なズレと演奏者が放つ緊張感が音楽をほどよく引き締める。主部の終盤では、異なるリズムが激しくぶつかり合う壮絶なクライマックスが築かれる。この部分は同じ音型が8回繰り返されるというしつこい音楽で、ある団員は「壊れたCDプレイヤーみたいや」と揶揄していたが、この執拗さこそニールセンの面白さであろう。中間部では、金管がコラル風の荘厳な旋律を奏でる。まるで聖堂の中にいるかのような厳粛なこの音楽は、土俗的・官能的な表情が支配的なこの交響曲全体の中でも異彩を放っている。最後は主部の旋律がフェードアウトしていき、弦のピッツィカートによって静かに閉じられる。

**第4楽章：**「con fuoco（火のように）」と表情指定された荒々しい音楽。弦楽器のトレモロと管楽器の和音によって轟然と始まるや否や、ヴァイオリンによる切り裂くように鋭い第1主題が襲い掛かる。第2主題部は対照的に穏やかな表情を見せるが、どこか沈痛な暗さを湛えている。展開部ではこの第2主題部の動機が厳めしく豹変し、管と弦が対決するようにこの動機をぶつけ合う壮絶なクライマックスを形成する。コーダは第1楽章同様、猛進するような推進力を得て、熱狂的に終わる。シンフォニストとしてのニールセンのデビューが熱狂的に迎えられたことは想像に難くない。

(T p. 遠藤 啓輔)

## ニールセン/序曲『ヘリオス』

この曲は第1交響曲の作曲から約10年後の1903年に、旅行先のギリシャで書かれた曲であり、地中海で見た日の出の印象を音楽で描いている。題名の「ヘリオス」はギリシャ神話における太陽の神である。ヘリオスは英雄譚が無いため今ひとつ存在感が薄い、「世界七不思議」のひとつに数えられた「ロドス島の太陽神ヘリオスの巨像」と言えばピンと来る人も多いと思う。また、太陽の神として毎日空を駆け巡っていることから、上空から世界を見つめる神、という性格を付与されるようになった。ニールセンはこの作品を「ヘリオス」の名を冠するにふさわしい曲に仕上げた。太陽を思わせる輝かしい響き、巨像のイメージを沸き立たせる堂々とした風格、世界の観察者に似つかわしい崇高な旋律。とりわけこの曲は、黎明から日没に至るまでの太陽の運行を音によって克明に表現した情景描写が極めて優れている。シベリウスの音詩『夜の騎行と日の出』と並び賞されるべき、太陽を音で描いた傑作と言えよう。

なお、僕は交響曲の解説で、ニールセンという作曲家の魅力について「泥臭くも逞しい彼の生き様がたつぷりと注ぎ込まれている」ことだと書いたが、この『ヘリオス』は洗練された均整美を誇る曲でニールセン作品としては異色である。この曲は、[低弦による短い導入]→[ホルンを主体とした雄渾な旋律]→[フル・オーケストラによる輝かしい合奏]、と展開し、弦楽器のフーガによって全曲の頂点が築かれると、後半は、[フル・オーケストラによる合奏]→[ホルンの旋律]→[低弦による短いコーダ]、というように前半の逆ルートをとる。実に簡潔なシンメトリーの構造をとるのである。地中海の絶景のみならず、均整美を



誇る古代ギリシヤの芸術に触れた感動も、この作品に影響を与えたに違いない。

なお、この曲は「序曲」と題されているが、オペラや演劇の前奏として書かれた曲ではなく、いわゆる「演奏会用序曲」にあたる（「交響詩」「音詩」のようなものと考えた方がよい）。

冒頭、大地があくびをするように、低弦が地響きのような音を2度立てる。静寂の中、4本のホルンが短い上昇音型を呼び交わしあい、少しずつ響きの色合いを変えていく。まるで、濃紺の東の空がわずかに赤みを増していく様に見えるようである。すると、漆黒の波頭におずかかな光が反射するように、弦楽器が分散和音を奏でる。朝の再来を喜ぶ鳥の声を木管が模倣すると、いよいよ水平線の彼方から太陽がその姿を現す。4本のホルンが今度はユニゾンで演奏する太陽の主題とも言えるべき雄渾な旋律は、太陽の巨大さと神々しさを見事に描き出し続けている。黄金色の雲がたなびくように、木管やヴァイオリンの音がゆったりと上下する。すると突然、3本のトランペットが閃光のように鋭い音を発する。太陽はある程度の高さに昇ると、急に乱反射して光の矢を投げかける。その情景を描写したものに違いない。音楽は一気に動的になり、幸福感あふれる旋律が堂々と歌われる。太陽の恩恵に感謝する人間の気持ちを描写したものである。神を讃える至高の音楽形式であるワーガによってクラマックスが築かれる。オーケストラが再び幸福感あふれる旋律を感情豊かに歌うと、音楽は少しずつワーガトとしていく。太陽が西の海へ向かっているのである。ホルンが太陽の主題をどこか残惜しげに歌うと、低弦が静かに応える。そして、2度大きなあくびをしてから大地は眠りにつく。

(曲目推薦者 T.P. 遠藤 啓輔)

### ベートーベン/交響曲第8番 作品93

交響曲第8番は、1812年夏から冬にかけて、彼のボヘミア旅行中に完成されたとされている。この直前にベートーベンは交響曲第7番を完成させており、第8番はしばしば第7番と一對のものとしてその対比が強調されがた。第7番が祝祭音楽としての色彩が濃く、強烈なリズムに縁どられた「動」の音楽であるのに対して、第8番は地味で第7番のような激しさを持たず、ウィットに富んだ小交響曲となっているのも、これら2曲を対比して考えたくなる原因である。が、この曲も祝祭的な色合いは第7番に負けず劣らず保持しており、第7番での筆の勢いが余って、「あふれ出した」第8番だとも言える。

この曲の作曲された時期、ウイーンは戦乱のさなかにあった。フランス皇帝、レオポルト・ナポレオンが率いるフランス軍に占拠されて1809年にウイーンは占拠され、ベートーベンの弟たちの元に身を寄せざるを得なくなった。この戦乱によりベートーベンの経済的基盤であった貴族階級も、ウイーンから離れ、この時期のベートーベンは決して恵まれた状態ではなかったと思われる。さらに、持病の耳疾の進行に伴い、聴力も次第に悪化し、筆談でしか意思疎通ができなかったほどであり、その作曲活動はさほど活発ではなかった。交響曲第7番の作曲には約4年を費やしているし、第8交響曲を完成させた後、ピアノ・ソナタ「ハンマークラヴィア」の完成まで、重要な作品を生み出せていない。

第8番はベートーベン自身が第7番の「大きな交響曲」に対し「小さな交響曲」と呼び、最も愛した交響曲である。コラモテで髪がモジャモジャで汚らしい格好をし、背が低くお世辞にもイケメンであつたとは言えないベートーベンは、不機嫌で他人を容易には寄せ付けられないようなどころがあつた。恩師ハイドンは彼を「蒙古の王様」と言い、ゲーテは（この曲の作曲時期にベートーベンと面会）「手に負えない野人」とベートーベンを評している。しかしながら、彼には非常に繊細で、ナイーブな一面があつたことが彼の様々な作品から見て取れる。ピアノ作品「エリーゼのために」は捧げられた人物は不祥なもので、およそワーグナーをして「精神病院行き」呼ばわりされた人物と同一の人間が書いたとは思えないような愛らしい曲であるし、シュリエッタ伯爵令嬢に捧げるために書いたとされるピアノ・ソナタ「月光」の2楽章は、シューマンが書いたかと思うほど、叙情的で平穏な響きに満ちている（後期のピアノ・ソナタ群でこの傾向は更に顕著となっていく）。



交響曲第8番の作曲時期にもベートーベンは恋をしていた(はずだ)。幾人もの女性と親密な手紙のやり取りをしていたことが知られているが、第8番の作曲の時期に、ベートーベンを心から受け入れてくれた女性との関係があったという説もある。しかしながらベートーベンには常に恋に臆病であり、残念ながら結果としては成熟した男女の精神的な関係を発展させて結婚生活や家庭生活を営むことはできなかった。彼が恋愛感情を持つ女性には常に「既に結婚している」かもしくは「今にも他人と結婚する」ような女性ばかり。恋に恋する中年でありながら決して一人の女性に深入りできない、純粹過ぎて情熱的過ぎる人物だったのだと私は思う(単なる「困った中年オヤジ」だと言ってしまえばそれまでですがね)。第8番はそんなベートーベンの内面により近く、お茶目で臆病、「苦悩から歓喜へ」なんて人前では言いながらも、実は運命に翻弄されてしまい落ち込んだり、浮かれたりする自分をさらけ出した私的な性格を持つ交響曲ではないか。ベートーベンは表には普段なかなか出せない自分の一面を表現したのだろう。

残念ながらこのベートーベンが愛した第8番は、当時まったく流行らず、大衆にはうけなかった。1814年に第7番や交響曲「ウェリントンの勝利」(戦争交響曲)と共に演奏会で第8番の初演が行われたが、ナポレオンによる占領という屈辱からようやく逃れ、愛国的な気分の高揚が最高潮に達していたウィーンの庶民にとって、やや地味な第8番は全く興味が持てなかった。ベートーベンは自分が第7番よりもはるかに出来が良いと思っていた第8番を大衆に否定され、怒ったとされているのだが、内面ではショックを受け、やはり自分の聴力が駄目になっているのかと、自信をなくしたのではなかろうか。交響曲第7番と戦争交響曲の大成功から作曲家としてのベートーベンの名声は最高潮に達するのだが、いくら華やかな生活をし、貴族にもてはやされたとしても、偏屈な作曲家は、自分自身の分身の一人のような第8番を世間に否定され、孤独だったのだろう、と私は思うのだ。

### 第1楽章 Allegro vivace e con brio F-dur

四分の3拍子のソナタ形式。冒頭に序奏を持たず、第1主題のf(フォルテ)の全奏で始まり、力強い推進力を持って進む。p(ピアノ)の軽快でどこことなくおどけた第2主題(原調の短3度下という珍しい調への転調)が提示されたあと、2拍子(ヘミオラ)の反進行と後続楽章につながるオクターブ跳躍のモチーフが全奏で力強く提示される。展開部は、低弦が主導して第1主題を高弦と低弦が交互に奏する形で進行し、fff(フォルティッシモ)でオケ全体を思う存分に鳴らす再現部に入る。第1楽章の白眉と言える部分であり、展開部後半から再現部にかけては、ぜひ低弦(チェロ、コントラバス)に注目していただきたい。ベートーベンはここで再現部まで徹底的に低弦パートに主題を弾かせており、執拗とも言えるほどである。一般人の耳よりも低音が良く聞こえていたためであろうか。終止部はクラリネットの第1主題(ただし短3度下へ転調)から始まり、転調を繰り返すことで次第に緊迫感を増すが、フェルマータでffからfに落ち、何だか間が抜けた雰囲気になる。再びpで音楽が始まって一気にfffのホルンの咆吼で盛り上がる。休止(G.P.)のあと、人が変わったかのように弦楽器のピチカートと管打の掛け合いのなか、第1主題を思い出して終わる。ベートーベンはおそらく当初は、盛り上がったところでお得意の「ジャン」を鳴らして終わるつもりだったのだろうが、改訂を行って今日の形になっている。第1楽章が静かに終わる交響曲はベートーベンには珍しいが、この曲の第1楽章終結部は、次の第2楽章スケルツェンドへの導入として非常に効果をあげている。

### 第2楽章 Allegretto scherzando B-dur

四分の2拍子。主題提示と再現部からなり、第3楽章と並び非常に短い。この楽章の冒頭で提示される、伴奏型の管楽器の連打はメトロノームの連打を表しているというが、眉唾ものである。ただ、ベートーベンの友人であった発明家で事業家のメルツェルはこの曲の初演から数年後にメトロノームを発表するが、同じような間隔で音を鳴らすことのできるこの機械をベートーベンは気に入っていたことは事実のようで、わざわざ自身が作曲した交響曲すべてのテンポをメトロノームによって後に指定している。管楽器の伴奏に乗って、バイオリンと低弦が楽しい主題を呼び交わし曲が進行していく。この主題は、「タ・

タ・タ・カレン」(あるいは「メルツェルのカレン」と同一の主題であり、ベートーヴェンが友人達と酒席で歌い、大いに盛り上がったという逸話がある。また、場面転換の道具として何度か弦楽器によりⅡによる64分音符という細かい音符による全奏がある(終結部では管楽器も参加する)。ここでも、第1楽章で重要な主題として登場したオクターフ跳躍が高弦により効果的に回想される。

### 第3楽章 Tempo di Menuetto F-dur

四分の3拍子。典型的なメヌエットトリオメヌエットの3部形式を取る。序奏にメヌエット部分を通じて奏される伴奏型が提示され、直後に優雅なめらかな旋律がインオリーブで提示される。しかしながら、伴奏が非常に粗野な音型でしかもピアノ以下の中低弦(コントラバスまで!)が総出で常に「キキキ」やるものだから、どうも落ち着かず「野人の踊り」という印象が強い。主題の展開のあと、ベートーヴェンはフアエツトに第1主題の再現を委ねる。これもまた、優美というより、どこかぎこちない、素材な印象を狙ったのだろう。トリオにあたる部分では、ホルンとクラリネットが田園風の旋律を吹き鳴らす。ここでもチェロが大忙しで8分音符の三連を延々と弾き続け、朗々としたホルンの旋律との対比が際だっている。全体に、伴奏と旋律のアレンジが気がなる楽章なのだが、ベートーヴェンはあえてそういった効果を狙ったのである。形式的には古典回帰しているように書いて(ベートーヴェンが交響曲においてメヌエットと明記したのは第1番以来のこと)諧謔性の風味を含む楽章である。

### 第4楽章 Allegro vivace F-dur

二分の2拍子。ソナタ形式だが、ロンド的な要素が強、ベートーヴェンがやりたいことをいろいろ詰め込んだ(やや消化不良気味であるように思うが)楽章である。ppで軽快な旋律が弦楽器によって示されて、オケ全体が休止後、Cis(C#)音が全奏で「ウィー」と粗野に強奏されて、お祭り騒ぎのⅡで第1主題提示が行われる。この転換の仕方が清突でコミカル、お茶目な感じである。管楽器と弦楽器が交代で主旋律を奏して発展するが、ここでも弦は低弦が主体である。この部分は高弦の8分音符六連音の難度が高く、見かけ上のオケの必死さに比べて、実際の音楽はどうしても若干地味である。第2主題は短3度上に転調後再び属調へと転調する。展開部は対位法風に展開し、オケ全体がパラボラになりかけたところで、「Dis(D#)-E」を繰り返して収拾し、再現部に入る。ここでフアエツトとインオリーブのF-Fのオクターフが現れる(交響曲第9番第2楽章でもF-Fインオリーブは更にソリストライクで効果を上げている)。

再現部のうち、高弦や管が第1主題を再度提示しようとするのを、低弦がfで印象的に制し、巨大なコーダへ入る。音階的な2分音符の旋律が反進行で組み合わされる中で三連音が印象的に提示され、第1主題冒頭の六連音とも組み合わせられる様子は「リズムの魔術師」といった印象。再び第1主題を短調で再現後、曲は終結部へと向かう。ベートーヴェンという曲の結びは「オケ全体による『ウィー』を期待する向きが多いだろうが、そんな方には大満足、この曲の結びは「これでもか!」というほどオケ全体を打ち鳴らして終わる。

また、この楽章はベートーヴェンが指定したテンポがいかに当てにならないか、という論拠としてしばしば提示される楽章である。全音符=84という指定は、あまりにも速すぎて何とか可能ではあるが、今日聴き慣れた演奏速度からするとだいぶ「人」な演奏になってしまふと思われ(原典ラフなフロムジカ団員には好評だろう)。もちろん、速度が速い方がよりコミカルな面が強調されるようには思われるが、本日は甘い第2主題が十分楽しめる速度で演奏されるはずである。

(曲目推薦者 K1.田中 慎一郎)



京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

|         |          |         |
|---------|----------|---------|
| 村上 治子様  | 鎗本 和弘様   | 小出 実様様  |
| 渡辺 真人様  | 谷口 佳隆様   | 小出 敏枝様  |
| 渡辺 和美様  | 岡本 幸雄様   | 木下 清美様  |
| 松村 里香様  | 中西 充弥様   | 西坂 壽美子様 |
| 越後 千代様  | 信広 澄子様   | 松浦 淳司様  |
| 渡辺 一真様  | 横田 洋子様   | 梅下 義記様  |
| 渡辺 由加理様 | 吉田 育弘様   | 大八木 文人様 |
| 渡辺 晴菜様  | 孝本 浩基様   | 吉原 和敏様  |
| 杉本 幸子様  | 吉田 寛子様   | 大内 きくゑ様 |
| 安藤 美知穂様 | 大八木 隆子様  | 岡島 敦子様  |
| 稲村 董雄様  | 大東 直勝様   | 小松 朋美様  |
| 遠藤 時金様  | 吉田 健太様   |         |
| 倉田 八重子様 | せき やすいち様 | ほか 5名様  |
| 井谷 宏美様  | 政岡 潤平様   |         |

2002年4月に発足しました「友の会」は、上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(2008年5月現在)

ご旅行は日本教育旅行で！！

各種旅行会社（JTB・日本旅行 etc）国内・海外  
パンフレット取扱い可能！！

他にもスポーツ・音楽合宿、スキー旅行、団体旅行も  
取り扱っております。

日本教育旅行株式会社

京都市下京区下数珠屋町通東洞院東入

TEL : 075-351-0405

<http://www.net-freeway.com>

担当 藤田 珠里

印刷のことなら

**大地社**

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604



# 京都フイロムジカ管弦楽団 Philomusica Orchestra Kyoto

## Konzertmeisterin

田原 靖子  
(Beethoven, Helios)  
西村 せり花  
(Nielsen/Symfoni)

## Bratsche

相澤 悠  
田中 邦人  
新居 英晃  
岩井 英樹※  
富 研一※

## Violine

小幡 拓也  
澤田 菜摘  
田原 靖子  
田村 うらら  
津田 卓郎  
西村 浩輔  
西村 せり花  
水野 紗綾  
山口 陽平  
飯田 俊也※  
磯貝 碧里※  
上山 瑞穂※  
江上 幹※  
大浦 一馬※  
木村 誠志※  
千代 健介※  
中野 大輔※  
西谷 真彦※  
西郷 奈穂※  
向井 清史※  
村上 彩※  
鰐洲 真理子※

## Violoncell

小林 豪  
多田 進  
山崎 敦子  
木坂 有男※  
喜多 僚※  
清水 敦志※  
館 雅洋※  
津田 博隆※  
綿引 聡史※

## Kontrabaß

鎌野 亘  
小道 信孝  
茂原 尚樹  
鳥山 拓  
山崎 正記  
後藤 志帆※  
丸山 拓史※

## Horn

芦原 俊平  
片山 真吾  
草木 美佐子  
坂口 裕志  
長尾 諭  
長岡 武志  
野田 啓  
増田 亜由美

## Klarinette

上高原 千寿子  
田中 慎一郎

## Fagott

石塚 有里子  
常見 英加

## Oboe

石原 才子  
須貝 絵里  
中西 充弥  
西坂 加奈

## Flöte

江藤 佳美  
加藤 勇仁  
長尾 友希  
吉津 佑紀

## Trompete

遠藤 啓輔  
竹内 恵理  
中西 美智子

## Posaune

大石 花月星※  
佐々木 一真※  
新川 恵※

## Tuba

中塚 隆介※

## Pauken

柳井 渉※

※：客演奏者

## 顧問

和田 之宏

## 団長

長岡 武志

## 事務局長

西村 浩

## 特別客演トリーナー

金正奉 (キム ジョングン)

1998年、大阪音楽大学作曲科卒業。のちに同大学専攻科で1年間指揮の勉強をする。作曲を田中邦彦氏、指揮をウイーン国立音楽大学の湯浅勇治氏をはじめ、金洪才、Ervin Aczelの各氏に師事。関西二期会、ザ・カレッジ・オペラハウス、エウフォニア管弦楽団の指揮など、オペラ、管弦楽の両分野で活躍。京都フイロムジカ管弦楽団の第18・19回定期を指揮。

## 弦トリーナー

岩井 英樹

ヴィオラを西岡正臣氏に師事。1997年より大阪フイロムジカ管弦楽団ヴィオラ奏者。

## 管トリーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。京都大学交響楽団金管トリーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アソフの各氏に師事。



# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪第24回定期演奏会♪

2008年12月14日 滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール（大ホール）

シベリウス/交響曲『クッレルヴォ』 作品7

指揮 清水史広 ソプラノ 好本由希子 バリトン 時宗 務

(予定)

## ♪新入団員随時募集中♪

募集パート：ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス

ピッコロ、クラリネット、ファゴット、トロンボーン、打楽器

※ピッコロはフルート兼務。クラリネットは特殊管兼務。トロンボーンはテナー、バスともに募集中。

※管・打楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があるため、楽器に関しては相談に応じます。

詳しくはお問合せください。

Tel : 090-8163-4626 (専用携帯電話 担当・竹内) E-mail : recruit@kyotophilo.com

## ♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円 【期間】 ご入会いただいた月より1年間

【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail : tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ <http://www.kyotophilo.com/>

## クラシック音楽の海外公演・国際交流

海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。

弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。

海外公演・国際交流のお手扱いはおまかせください。

### 海外公演実績・予定

同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演 1998年, 2001年, 2004年, 2007年

(ブラハ:ドヴォルザークホール/ブダペスト:リスト音楽院/ミュンヘン/ヴェルツブルク/グラーツ他)

岡山県桃太郎少年合唱団ヨーロッパ公演 1998年, 2005年

(ドイツ:レーゲンスブルク大聖堂/ブラハ:ルドルフィナム スークホール他)

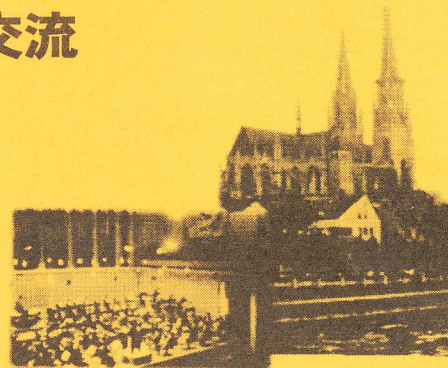
京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演 1999年 (ウィーン:ムジークフェライン大ホール他)

彦根市ベルリン第九オーケストラ・合唱団 1999年12月 (ベルリン:SFB放送大ホール)

京都市立音楽高等学校ウィーン公演 2007年 (ウィーン:カールス教会)

岐阜県交響楽創立55周年ウィーン公演 2009年 (ウィーン:ムジークフェライン大ホール) 予定

協力会社: ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社



<http://www.mitsuma.com/>

(社) 日本クラシック音楽事業協会会員

(株) ミツマ・ミュージックプロダクツ

〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F Tel.075-761-1213 Fax.075-752-5568